

第1章 土浦市のあらまし

1 地勢

土浦市は、東経 140 度 12 分、北緯 36 度 4 分に位置しています。日本第二の湖である「霞ヶ浦」の西岸にあり、市の西に筑波山麓が広がっています。東京から 60 km、成田空港から 40 km、筑波研究学園都市に隣接し、また、県都水戸から 45 km の距離にあります。

面積は、合併により 122.99 km² (霞ヶ浦部分 9.17 km² を含む) となっています。市内には桜川など 8 本の一級河川が流れ、霞ヶ浦から筑波山麓まで、豊かな自然環境を有しています。台地は関東ローム層であり、台地の間を帯状に谷津田が伸び、桜川沿いには低地が広がっています。

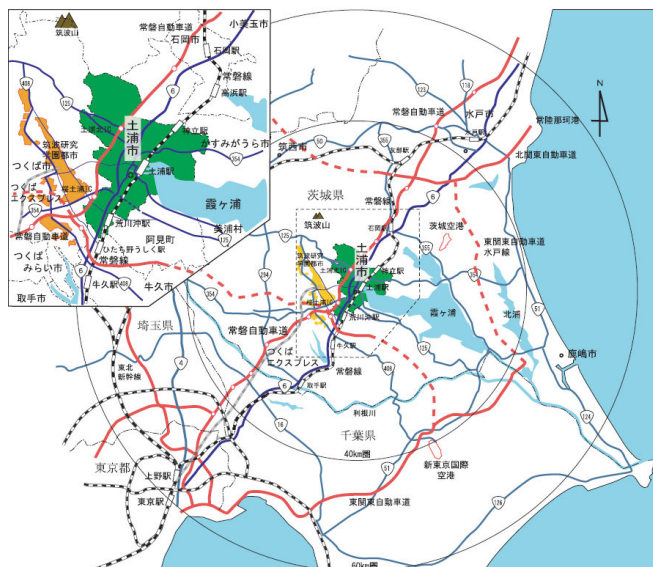


図 1-1-1 市域図

2 地形・地質

市の地形は、北部の新治台地と南部の稲敷台地及び両台地に挟まれた中央の低地部により形成されています。筑波山系に連なる新治地区北側が標高 200～400m と高くなっていますが、それ以外は起伏の少ない平坦な地形となっています。

市の下層部の地質は、海進・海退の繰り返しのなかで堆積した砂層・砂れき層により形成され、桜川の伏流水などを水源とする豊かな地下水を含んでいます。また、台地部の表層は関東ローム層が覆い、このローム層に蓄えられた雨水が台地下からしみ出し、谷津田やため池の水源ともなっています。

3 気候

土浦市の年平均(過去 10 年間)気温は 14.8℃、年間降水量は 1,234mm と適度な降水量となっており、比較的温暖な気象条件に恵まれています。

平成 23 年の平均気温は 15.2℃ で、降水量は 1,428mm となっています。水戸地方気象台土浦観測所における観測開始年からの年間平均気温と、年間降水量の推移を見ると、気温は上昇し、降水量も増加している傾向が見られます。

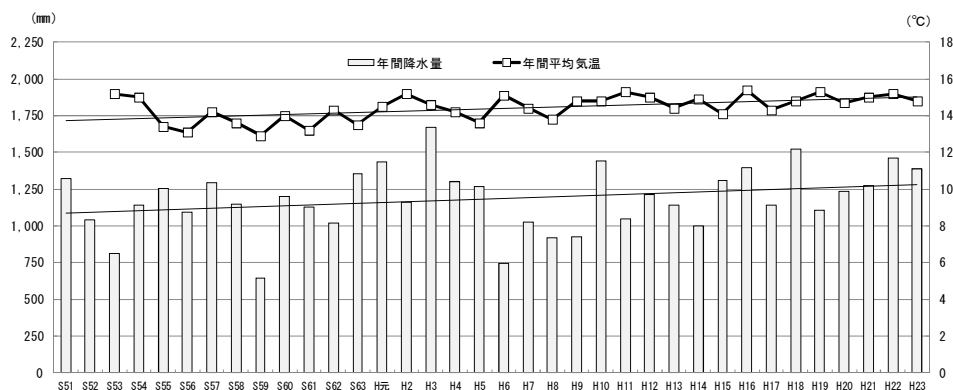


図 1-3-1 土浦観測所における年間平均気温・年間降水量の推移(気象庁)

4 人口

平成 17 年までの新治村の人口を含めた土浦市の人口の推移は、ほぼ横ばいとなっており、平成 23 年 10 月 1 日現在の人口は 143,460 人、世帯数は 57,222 世帯となっています。

以前は、県南地域の中心的な都市として、さらには都心通勤者の住宅地としても発展し、人口増加が続いていましたが、近年の傾向としては、少子化や周辺市町の発展や通勤者の都心回帰などにより、横ばいの傾向を示しています。

一方、世帯数は増加傾向にあり、核家族化が進んでいる傾向が伺えます。また、高齢者（65 歳以上）人口の推移を見ると、土浦市の 65 歳以上の人口は、平成 23 年 4 月 1 日現在で 32,024 人、市民全体の 22.4%（高齢化率）となっており、高齢化が進んでいる状況となっています。

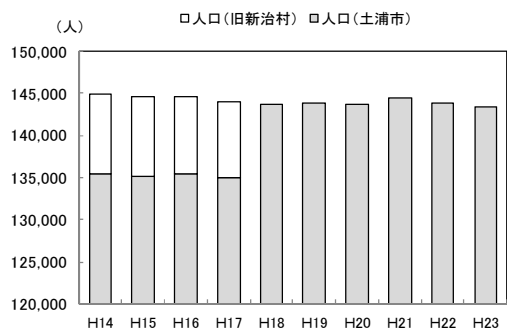


図 1-4-1 人口の推移

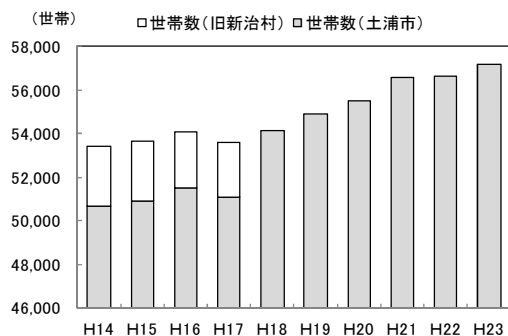


図 1-4-2 世帯数の推移

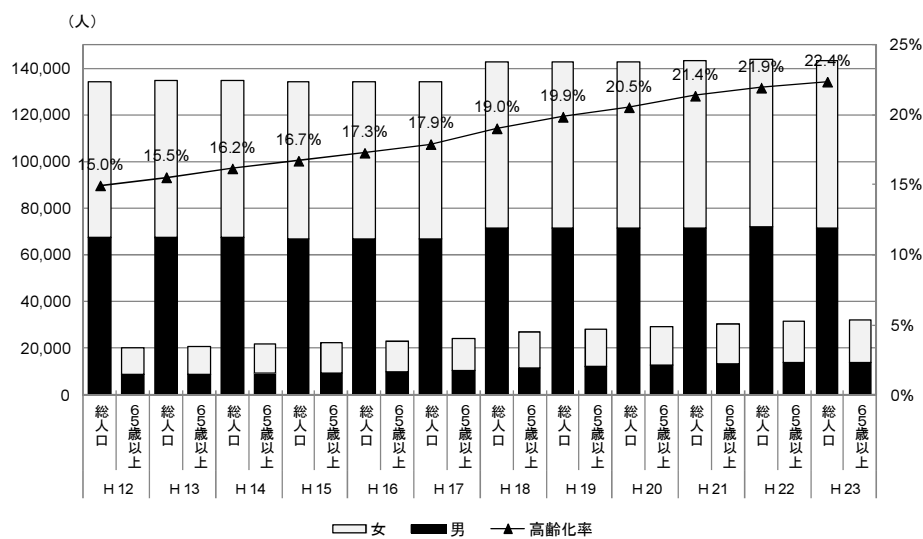


図 1-4-3 高齢者人口の推移

5 土地利用

土浦市の地目別土地利用は、農地（田・畑）が約 34%，山林が約 12%，宅地・その他が約 54%となっており、田・畑、山林の緑と、宅地・その他の割合が、おおよそ半ばずつとなっています。推移を見ると、平成 14 年度以降、田・畑、山林の緑の割合が減少してきており、近年においても同傾向となっています。

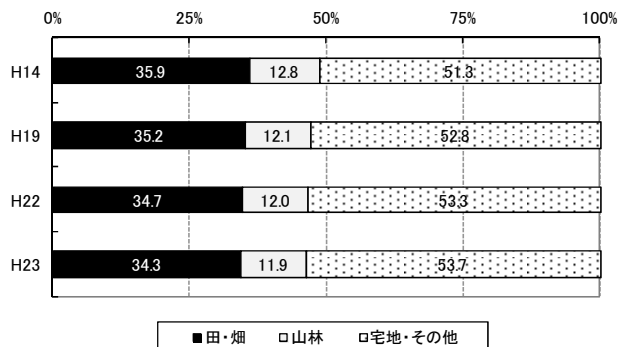


図 1-5-1 地目別土地面積の推移

6 交通

平成 23 年度において、市内には市道のほか県道や国道の予定も含めて都市計画道路が 46 路線あり、そのうち 17 路線について整備済みになっています。国道は、国道 6 号が南北に、国道 125 号と 354 号が東西に通っています。高速道路については、常磐自動車道が市内を通過しており、東京及び県北部へつながっています。公共交通機関の状況として、鉄道は、JR 常磐線が乗り入れ、市内には荒川沖駅、土浦駅、神立駅が設置されています。

バスについては、民間 5 事業者によるバス路線が運行されています。中心市街地の活性化とバス利用不便地域の緩和、公共交通利用の促進を目的として、平成 19 年 4 月よりまちづくり活性化バス「キララちゃん」が本格運行を開始しています。また、平成 23 年 10 月より新治地区におけるコミュニティバスとして土浦市地域公共交通活性化協議会の補助のもと、地元の団体に組織される新治地区コミュニティバス運営委員会により「新治バス」が試験運行されています。

さらに、福祉政策の一環として、市内在住の 65 歳以上の市民を対象に、事前予約で自宅等から指定の場所まで乗合で利用してもらう「のりあいタクシー土浦」を運行しています。

7 産業

市の産業構造は、右の図のように第三次産業の比率が高く、商業・業務都市としての特性がありますが、工業都市としての性格も併せ持っているといえます。その反面、第 1 次産業の農業と漁業は減少傾向にあります。

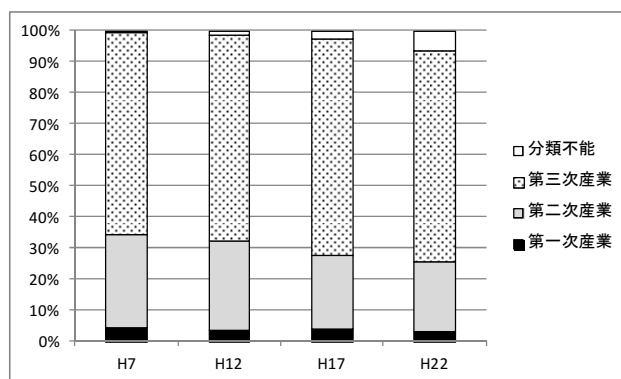


図 1-7-1 産業別人口の割合（国勢調査）

（1）商業

市の商業は、土浦駅を中心として県内第二の集積を誇っておりましたが、近年、郊外型大規模店舗の進出などにより、中心市街地の空洞化が進みつつあります。また、環境面においては、容器包装や使い捨て製品、食品くずなど大量の廃棄物の削減が課題となっており、循環型社会の構築に向けた取組における事業者の責任や役割は、大きくなってきています。

（2）工業

市内には、工業団地などに大規模工場が立地するほか、中小工場も数多く立地しています。また各種規制・基準の整備や企業努力により、大気汚染や水質汚濁などの産業型の公害は、大きく改善されてきています。しかし、事故の発生等により、環境へ大きな負荷を与える可能性を潜在的に持っていることもあり、日々の環境への配慮や施設の管理が重要であることはいふまでもありません。

（3）農業

市の農業は、日本一の生産量を誇る「れんこん」など、地域の特色ある産業となっています。また、田畑などからなる農地は、緑豊かな景観や多くの生き物の生息を支え、地域の自然環境の基盤にもなっています。しかし、農業は一面で、農薬や化学肥料による環境への負荷を生じ、霞ヶ浦の富栄養化の一

因にも挙げられています。このため、環境保全型農業など環境と共生する農業への転換が求められています。

（４）漁業

市には、霞ヶ浦を特徴づけるワカサギ、シラウオ、エビ、ハゼ類などの水産物があり、煮干・佃煮など加工品の材料となっています。反面、近年の湖沼環境の様々な変化等によって水産資源の減少も見受けられるようになり、漁業従事者も少なくなっています。

こうしたことから、水産資源の増大を図るため、ワカサギの人工孵化や、食用等に供されている魚種（有用魚種）の放流に加え、外来魚の駆除対策など、豊かな霞ヶ浦を取り戻すための取組が行われています。

（５）観光

筑波山麓や霞ヶ浦などの自然、城下町として歴史的雰囲気を残す「まちかど蔵」などの観光資源に年間約 38 万人の観光客を迎え入れています。この他、土浦全国花火競技大会には約 70 万人、キララまつりなどのイベントには約 12 万人と、年間を通して多くの観光客を集客しています。今後は、さらに観光資源を生かして、自然や農業体験志向を背景としたグリーンツーリズムやエコツーリズムへの需要にも対応していく必要があります。

